

2026年度 野球規則改正の要点解説

日本高等学校野球連盟
審判規則委員会

注：（ ）内数字は今回改正された27項目の符号

(1) 5.02 (c) を次のように改める。

① (i) の「投球動作および」を削除する。

② (ii) を次のように改める。(下線部を改正)

投手が打者に対して投球のためにボールが手から離れたとき、4人の内野手のうち、2人ずつは二塁ベースの両側に分かれて、両足を位置した側に置いていなければならない。

③ ペナルティ前段を次のように改める。

本項に違反した内野手が、投球後最初にボールを触れた場合、打者はアウトにされるおそれなく、安全に一塁が与えられ、各走者もアウトにされるおそれなく、1個の塁が与えられる。ただし、打者が安打、失策、その他で一塁に達し、しかも他の全走者が少なくとも1個の塁を進んだときには、規則違反とは関係なく、プレイは続けられる。

本項に違反した内野手が、投球後最初にボールを触れた内野手でなければ、投手の投球にはボールが宣告され、ボールデッドとなる。

④ 【ペナルティ原注】を追加する。

【ペナルティ原注】本項のペナルティが宣告されてもプレイが続けられたときは、そのプレイが終わってからこれを生かしたいと監督が申し出るかもしれないから、球審はそのプレイを継続させる。打者走者が一塁を空過したり、走者が次塁を空過しても〔5.06b3 付記〕に規定されているように、塁に到達したものとみなされる。

内野手の守備位置制限に関する規定(2023年OBR改正)で、4人の内野手が投球前に位置しなければならないタイミングを原文記載のとおり表記されました。

なお、本項は【注2】で記載されているとおり、引き続き我が国では適用しません。

※OBR(米国野球規則 Official Baseball Rules)

(2) 5.06 (c) (7) 【原注】の最終段落に次を追加する。

野手が、走者をだます目的で意図的にボールをユニフォームの中(たとえばズボンのポケットなど)に隠した場合、審判員は“タイム”を宣告して、すべての走者に、そのような行為を行なった瞬間にすでに占有していたと審判員が判断した塁から少なくとも1個の塁を与える。

野手が打球や送球のボールをユニフォームのポケットの中などへ意図的に隠す行為(いわゆる「隠し球」)をした際の規定(2019年OBR改正)で、【原注】の内容が追加されました。このような行為があったと審判員が判断した場合、直ちにボールデッドとして、その時点で占有していた塁から各走者に少なくとも1個の塁が与えられることが明文化されました。

(3) 5. 07 (a) (1) を次のように改める。

① ①の冒頭を次のように改める。(下線部を改正)

打者への投球に関連する動作を起こしたならば、中断したり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。

②【注】を次のように改める。(下線部を改正)

投手が投球に関連する動作を起こして、身体の前方で両手を合わせたら、打者に投球すること以外は許されない。したがって、走者をアウトにしようとして塁に踏み出して送球することも、投手板を外すこともできない。違反すればボークとなる。

ワインドアップポジションに関する表記で、該当箇所について、OBR「any natural movement associated with his delivery of the ball to the batter」という記載のと通りの表現に合わせた文言に修正されたもので、プレイングルールは従来どおりです。

(4) 5. 07 (a) (2) を次のように改める。

① ②の冒頭を次のように改める(下線部を改正)とともに、「(ストレッチとは、腕を頭上または身体の前方へ伸ばす行為をいう)」を削除する。

打者への投球に関連する動作を起こしたならば、中断したり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。

②【注1】を次のように改める。(下線部を改正)

(1) (2) 項でいう“中断”とは、投手が投球に関連する動作を起こしてから途中でやめてしまったり、一時停止したりすることであり、“変更”とはワインアップポジションからセットポジション(または、その逆)に移行したり、投球動作から塁への送球(けん制)動作に変更することである。

①、②について、セットポジションに関する表記の修正(上記(3)と同様)で、ストレッチに関する説明についてもOBRに記載はなく、その必要もないと思われることから削除されたもので、プレイングルールは従来どおりです。

③【原注】の最終段落に次を追加するとともに、【注6】、【注7】を追加する。

ただし、打者が打席に入る前に、投手がワインドアップポジションで投球する旨を審判員に伝えた場合には、前述のような投球姿勢であったとしても、ワインドアップポジションとして投球することができる。

投手は、打者が打撃中であっても、(i) 攻撃側チームにプレーヤーの交代があったとき、または(ii) 走者の位置が変わったときは、次の投球を行う前であれば、審判員にワインドアップポジションで投球する旨を伝えることができる。

【注6】ワインドアップポジションとして投球する旨を審判員に伝えた後であっても、攻撃側チームのプレーヤーが交代したり、走者の位置が変われば、セットポジションに戻すことができる。

【注7】アマチュア野球では、セットポジションに戻すときも、審判員にセットポジションで投球する旨を伝えなければならない。

③について、セットポジションの姿勢からワインドアップポジションで投球することを可能とする改正（2017年 OBR 改正）で、このような投球を「ハイブリッドポジション」と称します。

【注6】、【注7】として、一度ワインドアップポジションで投球することを申告した後でも、代打が送られた場合や走者の位置が変わった場合は、セットポジションに戻すことも可能ですが、アマチュア野球ではその際にも球審への申告が必要です。

なお、投手からの申告に基づき、投球姿勢について塁審にも共有する必要があるため、その申告手順については、「セットポジションの投手に関する規則改正（ハイブリッド）について」（令和8年1月29日付）において記載します。

（5）5.07（d）を次のように改める。（下線部を改正）

投手が、ストレッチを起こしてからでも、打者への投球動作を起こすまでなら、いつでも塁に送球することができるが、それに先立って、送球しようとする塁の方向へ、直接踏み出す必要がある。

塁への送球に関する表記の修正で、「準備動作」という文言を「ストレッチ」に統一することになりました。

（6）5.09（b）（7）を次のように改める。

①本文を次のように改める。（下線部を追加）

走者が、1人の内野手の股間または側方を通過する前で、さらに他の内野手が守備する機会がない状態のフェアボールに、フェア地域で触れた場合。（5.06c6、6.01a11 参照）

この際はボールデッドとなり、打者が走者となったために次塁への進塁が許された走者のほかは、得点することも、進塁することも認められない。

インフィールドフライと宣告された打球が、内野手を通過する前で、さらに他のいずれの内野手も守備する機会がないと判断される前に塁から離れている走者に触れたときは、打者、走者ともにアウトになる。

②【注2】を次のように改め（下線部を改正）、【注3】を削除し、【注4】以下を繰り上げる。

塁に触れて反転したフェアボールに走者が触れた場合、フェア地域またはファウル地域に関係なく、その走者はアウトになり、ボールデッドとなる。

走者がフェアボールに触れた場合の規定（2019年 OBR 改正）で、（6.01（a）（11）の内容と同様であり、OBR のとおりに反映されたもので、プレイングルールは従来とおりです。

「ベースに触れて反転したフェアボールに走者が触れた場合」の取り扱いですが、「ファウル地域」にいた走者であっても、この走者は「アウト」になる解釈に改められました。走者の位置に関係なく「アウト」になります。

（7）【5. 100原注】の第5段落として次を追加する。

監督またはコーチがマウンドに行った際、投手が他の守備位置に移ったかどうかに関係なく、そのイニングでその投手のもとへ1度行ったことになる。

監督・コーチが投手のもとに行ける回数（1 イニングに同一投手のもとへ行くことができる制限）の規定（2019 年に OBR で改正）で、【原注】の内容が追加されました。

投手交代があったとしても、その投手が試合から退くか否かに関係なく「1 回のカウント」となる考え方となります。

監督・コーチが投手のもとへ行くにあたり、投手のもとに行ってから球審にその投手の交代（＝ベンチに退く）が告げられても、形式上では 1 回のカウントをすることになるが、その投手は試合から退くことになるため、その投手に対する『1 回カウント』は直ちにリセットされることになります。

しかしながら、その投手がベンチに退かずに他の守備位置へ移った場合、つまり監督・コーチが投手のもとに行ってから球審にその投手の交代（＝他の守備位置に移る）が告げられた際は、この投手に対して「1 回カウント」を保持したままの状態での他の守備位置につくこととなります。（これは先に球審に他の守備位置に移る旨を告げた場合も同様）

その後、同じイニングにおいて、交代した新たな投手のもとへ監督・コーチがこの投手のもとへ行くことは、同一投手ではないため許されるが、例えばワンポイントで再び投手に戻ってきた場合、その後に監督・コーチは 2 度行くことはできないため、ここで行ってしまえば、この投手は自動的に試合から退くことになるということです。

なお、【注 5】として、アマチュア野球では本項に関する取り扱いについて、所属する団体の規定に従うこととなりますので、高校野球における扱いは従来どおり「監督またはコーチが、マウンド上の投手のもとへ行く回数規制」（高校野球特別規則 1 4）に基づき運用します。

（8） 6. 0 1 (a) (8) を次のように改める。（下線部を改正）

三塁または一塁のベースコーチが、走者に触れるか、またはつかんだりして、走者の三塁または一塁への帰塁、あるいはそれらの離塁をアシストしたと審判員が認めた場合。

ベースコーチの違反行為に関する表記の修正で、下線部の文言を OBR 原文の記述にあわせて、より適切な表現に書き改められたもので、プレイングルールは従来とおりです。

ベースコーチが走者の帰塁または離塁を「アシストする」とは「助ける」ことであり、ベースコーチと走者が接触しても、結果として走者の帰塁または離塁を「助ける」ことでなければ、規則適用にはなりません。

（9） 6. 0 1 (h) 【付記】を次のように改め（下線部を改正）、末尾に【6. 01h 原注】

として「定義 5 0 オブストラクション【原注】」を移行する。

捕手はボールを持たないで、得点しようとしている走者の進路をふさぐ権利はない。塁線（ベースライン）は走者の走路であるから、捕手は、ボールを処理しようとしているときか、すでにボールを持っているときだけしか、塁線上に位置することができない。

オブストラクションに関する規定の配列・表記の修正で、OBR に記載されたとおりの配列および表現に見直しを行いました。また、定義 50（オブストラクション）にある【原注】を【6. 01h 原注】にそのまま移動されたもので、プレイングルールは従来とおりです。

(10) 6. 02 (a) (1) を次のように改める。(下線部を改正)

投手板に触れている投手が、投球に関連する動作を起こしながら、中断したり、変更したりして投球を完了しなかった場合。

ボークに関する表記の修正(上記(3)と同様)で、OBR 記載のとおり文言となったもので、プレイングルールは従来とおりです。

(11) 3. 02 (a) を次のように改める。

①【付記】の「プロフェッショナル野球(公式試合および非公式試合)」を削除する。

②【注1】を次のように改める。(下線部を改正)

NPBでは、金属製バット、木片の接合バットおよび竹の接合バットは、コミッショナーの許可があるまで使用できない。

③【注2】を次のように改める。(下線部を改正)

アマチュア野球では、使用できるバットについては、所属する団体の規定に従う。

バットに関する表記の修正で、「プロ・・・」の文言を削除、もしくは「NPB」と整理されました。使用できるバットについては、アマチュア野球では、各所属団体で取り決めがあることを確認し、文言を修正しました。

(12) 3. 02 (d) を次のように改める。

①(d) 着色バットは、規則委員会の許可がなければ使用できない。

②【注1】、【注2】を統合し、次のように改める。

【注】我が国では、所属する団体の規定に従う。

③【3.02 注】を追加する。

【3.02 注】我が国では、本項(a)、(b)および(d)または各所属団体の規定に違反しているバットは試合から取り除かれ、そのバットを使用した場合は(c)〔付記〕及び同〔原注〕後段を適用する。なお、6.03(a)(5)規定のいわゆる改造バットについては、同項記載のとおりである。

着色バットに関する表記の修正および【3.02 注】の新設で、①、②については、着色バットの使用について、NPB・アマチュア野球を含め、所属する団体の規則委員会の許可が必要ながことが明記されました。

③については、【3.02 注】が追加され、所属団体に規定されたバットの使用が発見された場合は、そのバットは試合から除かれることが明記されました。

ただし、規定に違反しているバットを使用した場合のプレイは有効であり、打者にアウトを宣告したり試合から除いたりすることはありません。なお、6.03(a)(5)に記載の通り、改造されたバットを使用した打者にはアウトが宣告されます。

(13) 3. 03 (j) 【注1】を次のように改める。(下線部を改正)

【注1】NPBでは、本項を適用しない。

ユニフォームに関する表記の修正で、上記(11)と同様に「プロ野球」などの文言を「NPB」と書き改められました。

- (14) 3.08 本文の「プロフェッショナルリーグでは、」と (b)「メジャーリーグの」を削除する。

ヘルメットに関する表記の修正で、ヘルメットの着用義務について、「プロフェッショナルリーグ」、「メジャーリーグ」の文言が削除されました。なお、2025年公認野球規則改正により【3.08 注】が新設され、アマチュア野球では3.08 全体にかかるものとして、所属する団体の規定に従うことになっています。

- (15) 3.09 本文の「本条は、プロフェッショナルリーグだけに適用される。」と【付記】の「プロフェッショナルリーグ用の」と「プロ野球」を削除し、【注4】を次のように改める。
- 【注4】我が国では、所属する団体の規定に従う。

商業的宣伝に関する表記の修正で、上記(11)と同様、『プロ・・・』の文言削除【注4】をプロ野球およびアマチュア野球での取り扱いが整っていることから、我が国として1つにまとめる表記に改められました。

なお、高校野球では、「高校野球用具の使用制限」に基づいて運用します。

- (16) 4.03 (e) に【注】を追加する。
- 【注】我が国では、天候状況によっては、30分を待つことなく試合を打ち切ることができる。

一時中断した試合に関する規定【注】の新設で、天候状況等により試合が中断され、回復の見込みがないと判断される場合には、30分経過しなくても試合を打ち切ることが可能となりました。なお、高校野球では、従来どおり「継続試合の取り扱い」(高校野球特別規則22)に基づき運用します。

- (17) 5.08 (b) 【注】の最終段落を次のように改める。(下線部を改正)
- 打者走者または三塁走者が進塁に際して塁に触れ損ねた場合は、守備側のアピールがあったときだけ、審判員はアウトの宣告を下す。

最終回の裏、満塁・打者四球等で決勝点となる状況に関する規定(【注】の改正)です。

この場面で、次塁に進んで触れる義務を負う走者は三塁走者および打者走者ですが、今回の改正により、次塁に進んで触れる義務を負う走者が次塁に触れ損なった場合、審判員は守備側のアピールがなければ「アウト」にすることはできなくなりました。つまり、守備側のアピールがあって、これを認めたときに「アウト」を宣告することになります。

なお、それぞれの走者が次塁に進もうとしない場合、審判員は適宜な時間がたてば、アピールを待つことなく「アウト」の宣告できることは、従来どおりです。

(18) 5. 10 (e) に【注】を追加する。

【注】アマチュア野球では、所属する団体の規定に従う。

コーティシーランナー（相手の好意で適宜に許される代走者）禁止規定【注】の新設で、アマチュア野球では各団体の規定されているため、本項に新たに【注】が新設されました。

なお、高校野球では、従来どおり「臨時代走者」（高校野球特別規則 1 1）に基づき運用します。

(19) 5. 10 (g) (2) に【注】を追加する。

【注】我が国では、本項にある“イニングの初めに準備投球を行った投手”を“イニングの初めに投手が、ファウルラインを越えてしまえば”と置きかえて適用する。

投手の投球義務に関する規定の【注】を新設で、昨年改正した『イニングの初めに登板する投手に関する投球義務』について、本文では『準備投球を行なった』ときとなっており、準備投球を開始してしまえば、第 1 打者（代打者を含む）の打撃を完了しなければならないことになっています。

その後、MLB では本規定の基準を『ファウルラインを越えたとき (5. 10(i))』で運用しており、NPB も昨年採用しているということで、今回【注】を見直し、「準備投球を行なったとき」から「ファウルラインを越えたとき」に基準を改めました。

つまり、イニングをまたぐ投手がイニングの初めに投手板へ向かってファウルラインを越えてしまえば、従来は第 1 打者に代打者が出た場合、その代打者に対して打撃を完了させる義務はなかったが、本改正によって、代打者であっても打撃を完了させる義務が生じることになります。

なお、高校野球では、従来通り「控え投手および既に試合に出場している投手の取り扱い」（高校野球特別規則 1 2）に基づき運用します。

(20) 5. 10 (k) 【注 2】を次のように改める。

【注 2】我が国では、ベンチあるいはダッグアウトに入ることのできる者については、所属する団体の規定に従う。

ベンチに入ることが許される者に関する【注】の表記の修正で、【注 2】の試合中にベンチあるいはダッグアウトに入ることができる者について、NPB・アマチュア野球を含め、所属する団体の規定に従うことが明記されました。

(21) 5. 10 (l) 冒頭の「プロフェッショナルリーグは、」を削除する。

監督・コーチが投手のもとに行くことに関する表記の修正で、上記 (1 1) と同様、『プロ・・・』の文言が削除されました。監督・コーチがマウンドに行ける回数については、アマチュア野球では、所属する団体の規定に従うことになります。

なお、高校野球では、従来通り「監督またはコーチが、マウンド上の投手のもとへ行く回数規制」（高校野球特別規則 1 4）に基づき運用します。

(22) 【7.02注】を次のように改める。

【7.02注1】NPBでは、本項を適用しない。

【7.02注2】アマチュア野球では、所属する団体の規定に従う。

サスペンデッドゲームに関する規定で、昨年に大幅に見直しとなった本項については、NPBとアマチュア野球で取り扱いが異なるため、【7.01注1】と【7.01注2】でそれぞれ分けることにしました。

なお、高校野球ではサスペンデッドゲームは採用しておりませんので、従来通り「継続試合の取り扱い」（高校野球特別規則22）に基づき運用します。

(23) 8.01(b)を次のように改める。(下線部を改正)

各審判員は、所属する団体の代表者であり、本規則を厳格に適用する権限を持つとともに、その責にも任ずる。審判員は、プレーヤー、コーチ、監督のみならず、クラブ役職員、従業員でも。本規則の施行上、必要があるときには、その所定の任務を行なわせ、支障のあるときは、その行動を差し控えさせることを命じる権限と、規則違反があれば、規定のペナルティを科す権限とを持つ。

審判員の権限に関する表記の修正で、上記(11)と同様、『プロ・・・』をアマチュア野球含めた適切な文言に書き改められました。

(24) 【9.22注】を次のように改める。(下線部を改正)

NPBでは、“組まれている試合総数”を“行った試合数”に、“マイナーリーグ”を“ファーム・リーグ”に置き換えて適用する。数の算出にあたり、端数は本条(a)(b)各〔原注〕に準ずる。

(記録) 各最優秀プレーヤー決定基準に関する【9.22注】の表記の修正で、上記(11)と同様、『NPB』と書き改め、イースタン・リーグおよびウエスタン・リーグを『ファーム・リーグ』と1つにまとめられました。

(25) 定義38(2)の「リターン」を削除する。

(2)「クイックリターンピッチ」の「リターン」について、5.07(a)(2)【原注】や6.02(a)(5)【原注】は「クイックピッチ」とあり、どちらも同じ意味であることから表記を「クイックピッチ」に統一しました。

(26) 定義64の「RETURN」と「リターン」を削除する。

上記(25)と同様の考えから、「RETURN」と「リターン」を省くことになりました。

(27) 次の項目の「打者」の表記を「打者走者」に改める。

5.06(b)(4)(G)【規則説明】

5. 06 (b) (4) (I) の4行目
5. 08 (b) の4行目
5. 09 (b) (1) (2) 【原注】 1つ目の例の3行目
5. 09 (b) (6) 【原注】 5行目と8行目
5. 09 (c) (2) 【原注】 2つ目の例の2行目
9. 05 (b) (4)
9. 12 (f) (1) ①
定義28 「フィールドースチョイス」
定義30 「フォースプレイ」 【原注】 1つ目の例の2行目と6行目

規則書巻頭『凡例』の項目にある『打者走者』、『打者』の表現を改めて見直されました。
またこれにより、『凡例』に記載する必要がなくなったため、上記に関する項目が削除されました。なお、プレイングルールは従来どおりです。

以上